

〈2021 年度〉

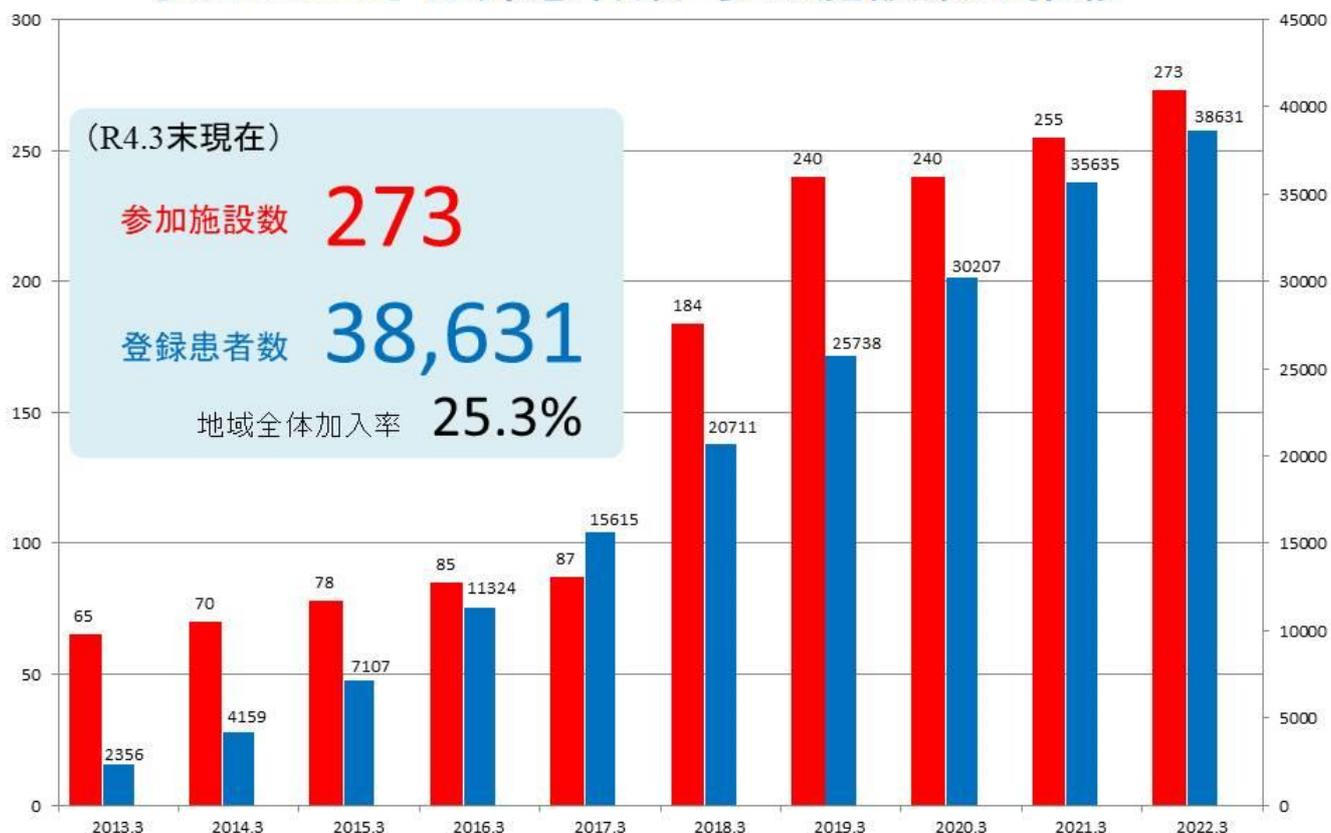
ism-Link の検証

南信州在宅医療・介護連携推進協議会
飯田下伊那診療情報連携システム運営小員会

医療と介護の連携において、円滑な情報共有は重要な課題の一つとなっている。飯田下伊那診療情報連携システム（ism-Link）は、2009年度に導入され、2011年12月に情報開示6病院を中心に運用を開始した。その後、システム更新を機に、2016年4月に南信州広域連合に事務局を設置し、南信州在宅医療・介護連携推進協議会の飯田下伊那診療情報連携システム運営小委員会において運用方法等の検討を行っている。その中で、ism-Linkが当地域の医療・介護連携における「情報インフラ」として適切なシステムであるかどうかを検討するため、定期的にism-Linkの利活用の状況、医療・介護連携における効果等について検証作業を実施している。

	項目	検証に必要な主要データ	詳細
1	基本事項	参加医療・介護関係事業者数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の医療・介護関係事業者数把握（資源把握） ・参加事業者数集計（全体/業種別） ・参加率（地域全体/業種別）
2	基本事項	ism-Linkに同意した住民の数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の登録患者数
3	病病連携	病院間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病院間アクセス件数 ・地域連携パスにおけるism-Linkでの連携 ・その他転院時におけるism-Linkでの連携
4	病診連携	病診間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病⇒診アクセス件数 ・診⇒病アクセス件数 ・がん地域連携パスにおけるism-Linkでの連携
5	多職種連携	医療介護連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・連携シート作成数に対するism-Link登録患者 ・診病介間アクセス件数
6	情報共有項目	項目別閲覧状況	各項目 ^{※1} のアクセス件数 ※1 画像・検査・注射・処方・レポート・ファイル・ノート

[ism-Link] 登録患者数・参加施設数の推移



ism-Link 参加施設の内訳

2022年3月31日

施設種別	地域施設数	参加施設数	参加率
病院	9	9	100%
診療所	104	68	65%
歯科診療所	77	24	31%
調剤薬局	65	64	98%
訪問看護ステーション	14	14	100%
介護関係事業所(行政含む)	130	89	68%
合計	399	268 ※	67%

※参加事業所として登録があり、休業している事業所が5施設あるため、上記図の施設数との差異があります。

検証項目 3～6

(1) アクセス件数の年次推移

図1 施設別アクセス件数の年次推移

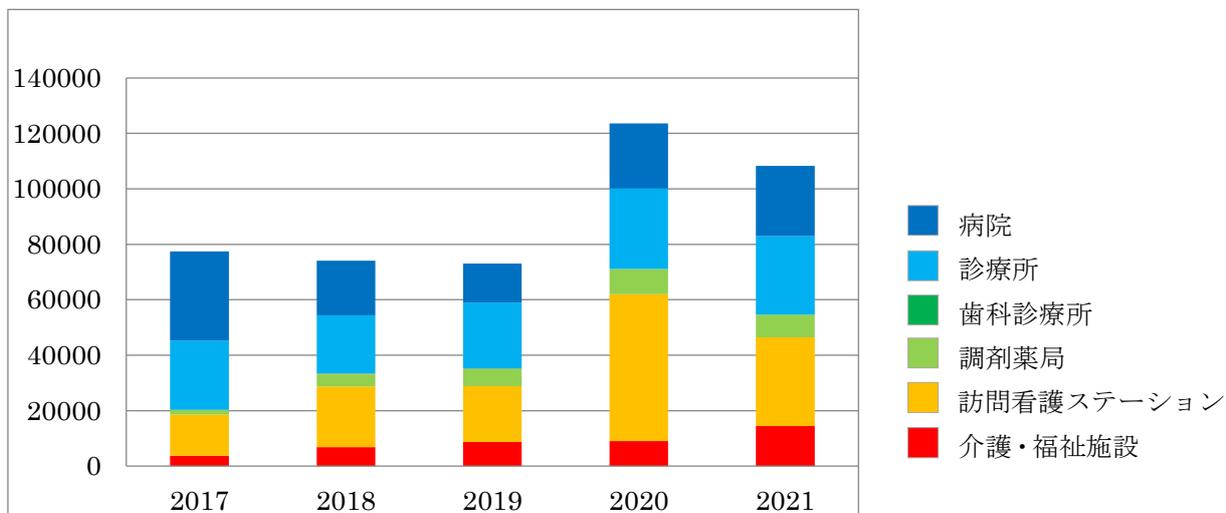


図2 職種別アクセス件数の年次推移

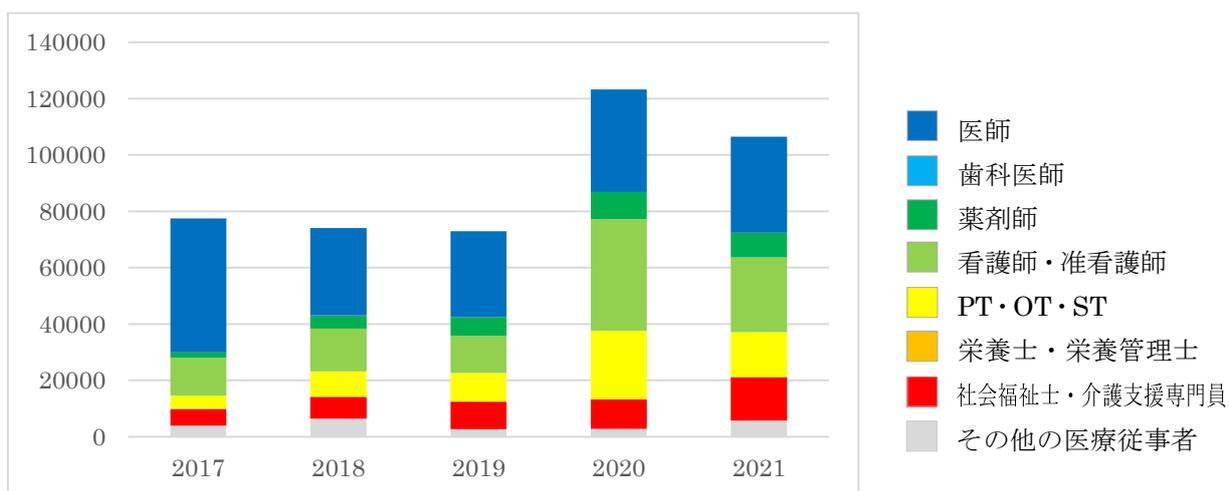
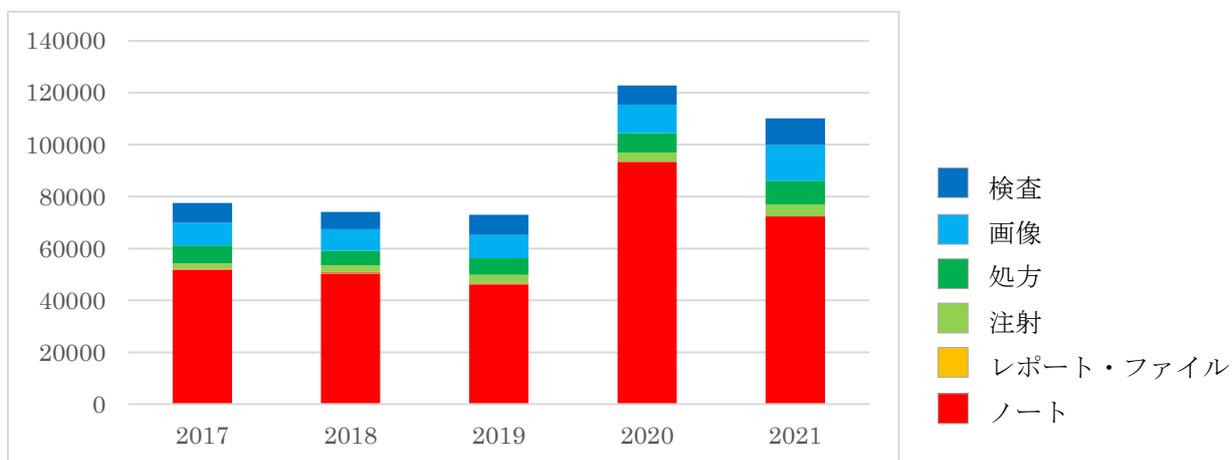
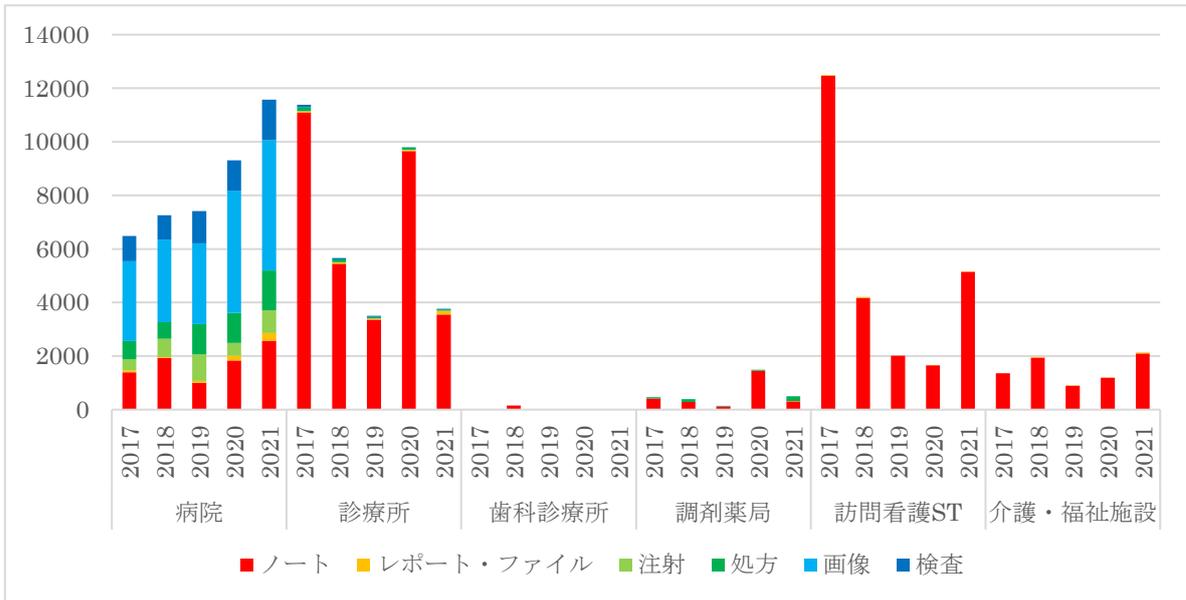


図3 項目別アクセス件数の年次推移



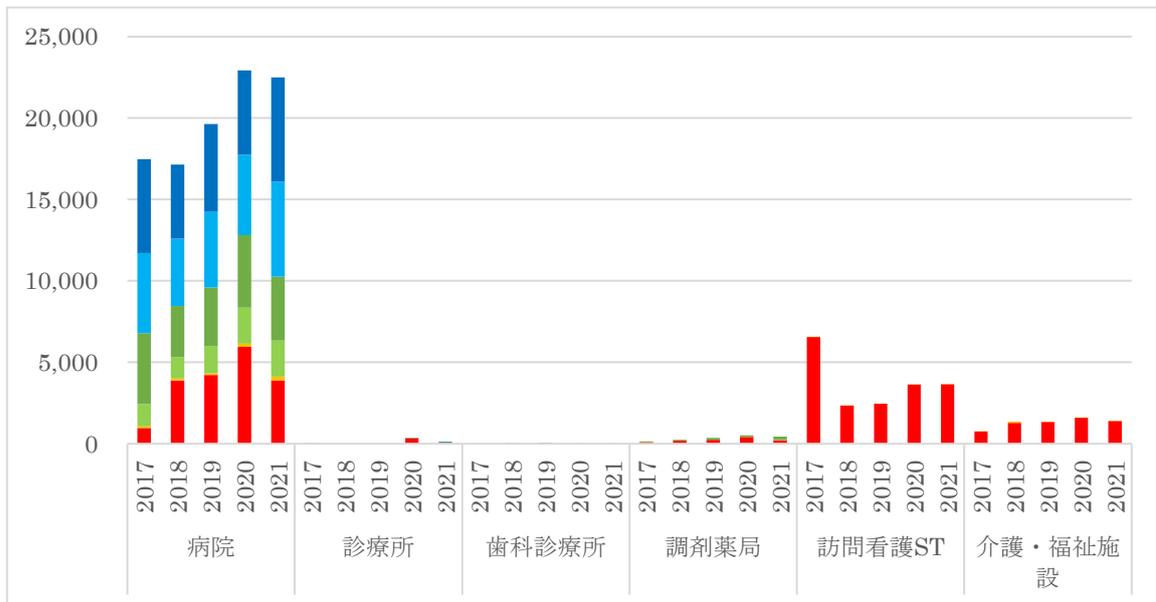
(2) 施設別のアクセス状況

図 4 病院の参照先・参照項目



■ 検査 ■ 画像 ■ 処方 ■ 注射 ■ レポート・ファイル ■ ノート

図 5 診療所の参照先・参照項目



■ 検査 ■ 画像 ■ 処方 ■ 注射 ■ レポート・ファイル ■ ノート

図 6 歯科診療所の参照先・参照項目

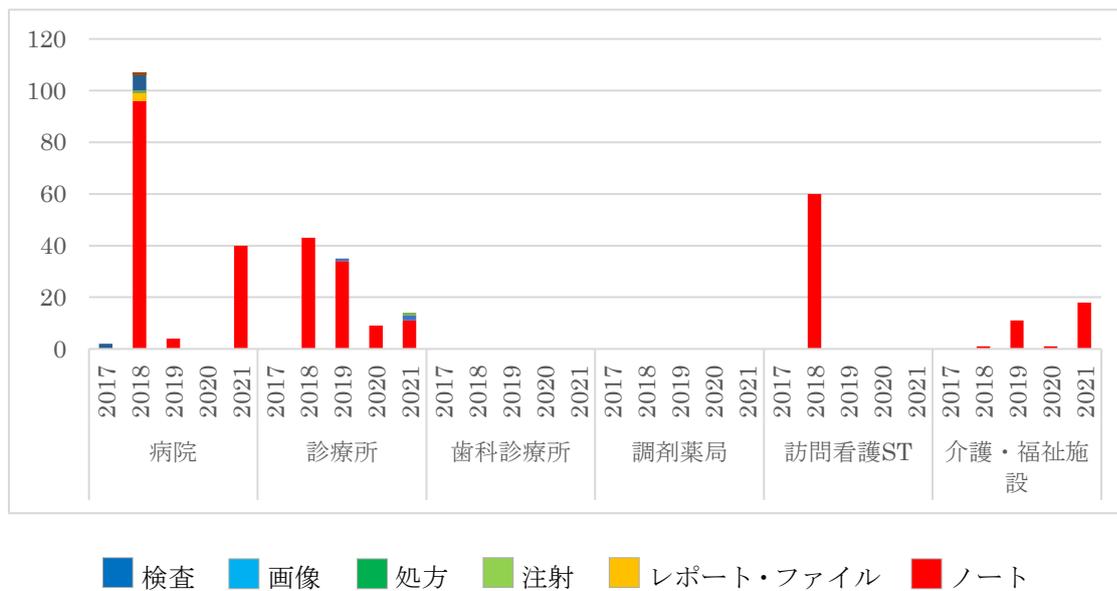


図 7 調剤薬局の参照先・参照項目

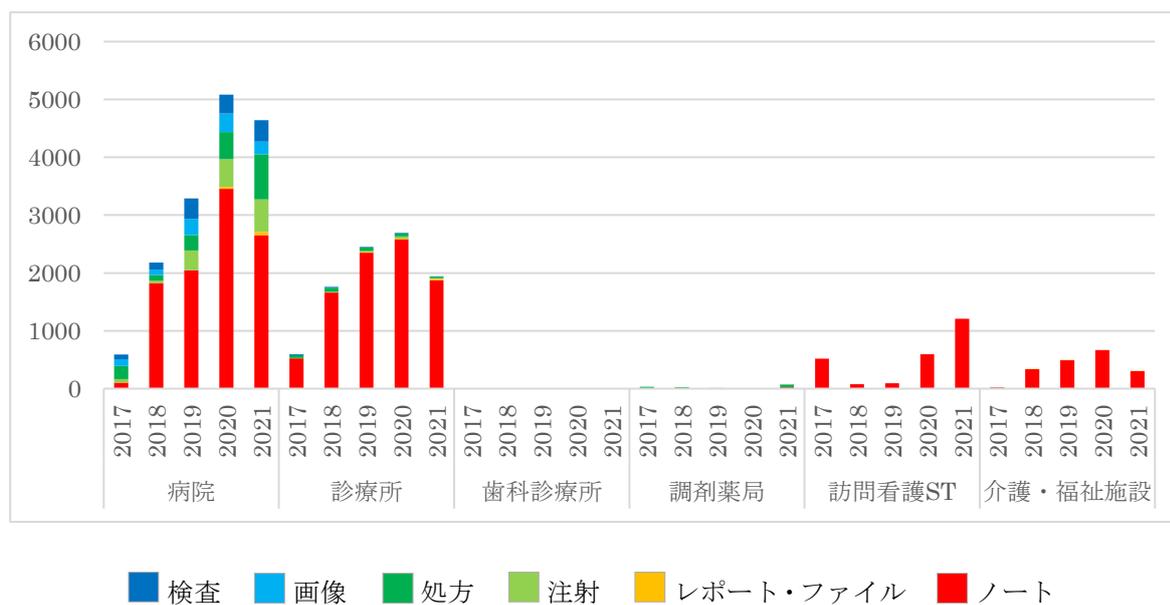


図8 訪問看護ステーションの参照先・参照項目

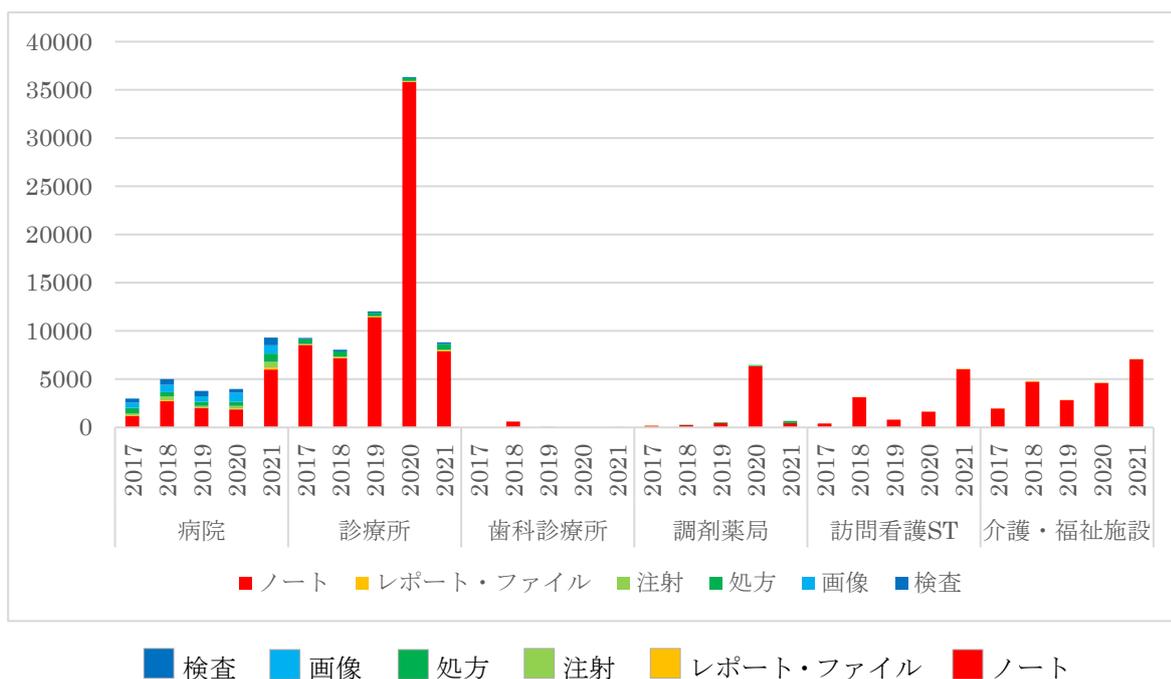
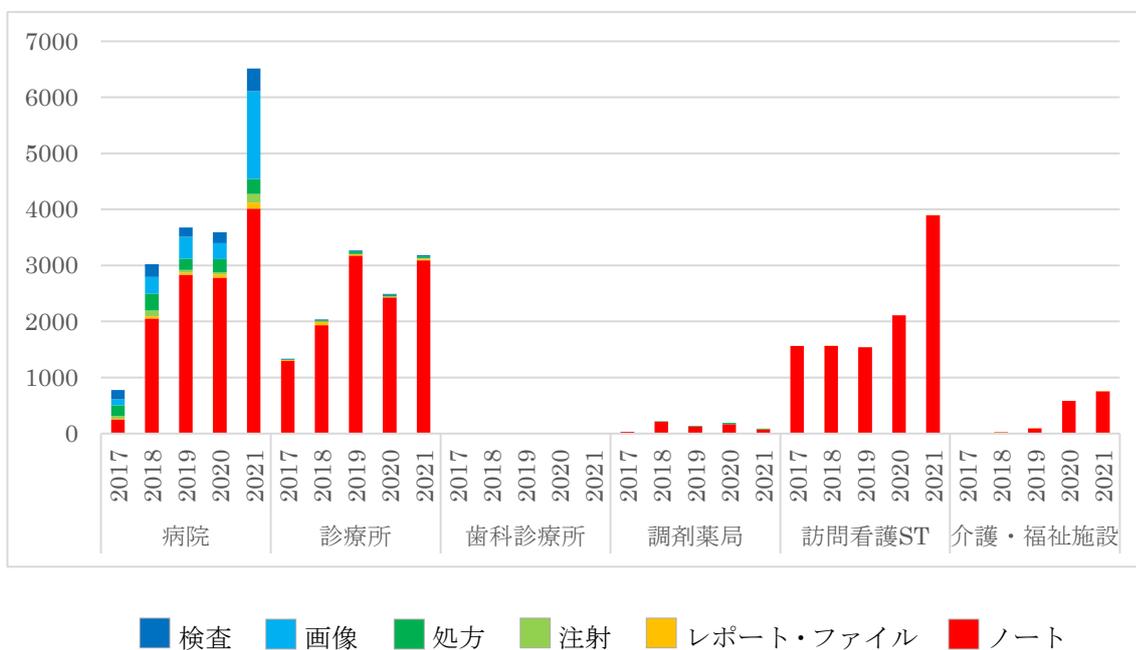


図9 介護・福祉施設の参照先・参照項目



アクセスログの解析結果

(1) アクセス件数の年次推移

アクセス件数については 2017 年から 2019 年は 70,000 台で横ばいとなっていたが、2020 年度は 120,000 台にアクセス件数が大幅に増え、2021 年度も 100,000 台を超え安定的にアクセス件数を伸ばしている。また、病院と診療所での利用は 2017 年以降横ばいであるが、調剤薬局、訪問看護ステーション、介護・福祉施設でアクセス件数の増加が目立つ。(図 1)

2017 年までは医師のアクセスが全体の 60%以上を占めていたが、同年に南信州在宅医療・介護連携推進協議会において多職種への参加が承認されことにより他職種が数値を伸ばし、2020 年以降では対照的に医師以外の職種の参照が 70%となっている。(図 2)

項目別ではノートの参照が 60~75%を占めているが、医療情報(検査・画像・処方等)へのアクセス件数も増えており、中でも画像の参照が最も多くなっている。(図 3)

(2) 施設別のアクセス状況の解析

病院の総アクセス数は 2015 年以降増減を繰り返しているが、これは年によって、診療所と訪問看護ステーションのノートの参照数に増減があるためである。病病間の医療情報(特に画像)の参照は着実に増えており、病院では、ism-Link は医療機関間の診療情報の共有のための手段の一つとして定着している。(図 4)

診療所では主に病院の医療情報の参照に利用されている。また、在宅医療を積極的に行っている診療所では多職種(特に訪問看護)との連携のため利用されている。(図 5)

歯科診療所では ism-Link の利用は進んでいない。(図 6)

調剤薬局では特に病院、診療所との間のコミュニケーションの手段として利用されつつあり、病院の医療情報も参照されるようになってきた(図 7)

訪問看護ステーションは診療所との連携での利用が主体であり、2020 年度は特に診療所のノートの参照数が多かったが、2021 年度は例年並みの数値となった。一方で、病院との情報共有で利用されるようになってきたため、2021 年度では今までになく対病院の数値は伸びている。(図 8)

介護・福祉施設では主に病院・診療所・訪問看護ステーションでノートの参照に利用されていたが、2021 年度では新たに施設の理学療法士による画像とノート活用があり、数値を伸ばしている。また、訪問看護ステーションとの連携も伸びている。(図 9)

ism-Link は医療機関間での医療情報の共有、在宅医療での多職種連携のための「情報インフラ」として定着し、利用が進んでいる。